多文化をあきなう

地域と世界がつながるフェアトレード

土井（ど） ゆきこ　フェアトレード・ショップ風"s（ふ～す）代表・フェアトレード名古屋ネットワーク代表

フェアトレードをまちぐるみで応援するフェアトレード・タウン。
その考え方は、生産地と消費地をつなげるだけでなく、
まちに暮らす人びと同士をつなげ、まち自体を活性化する可能性を秘める。

フェアトレード店開業

わたしは、普通の女の子だった。学力も体力も芸術系も普通、本を読むわけでもなく世界についても無頓着であった。高校を卒業して損保会社に就職、広告会社に転職して寿退社。三人の男の子に恵まれた。末子が二歳のときにパートタイムで働き始めた。その後、女性起業セミナーを受講し、「生涯現役で人の役に立つことをしたい」という思いから一九九六年に愛知県女性総合センター一階に中部地区ではじめてのフェアトレード専門店をオープンした。子育て真っ最中のときに自宅マンションで開催した出前コンサートで、エビやバナナの生産者が貧しい生活を送っていることを聞き、わたしたちの暮らしが東南アジアの人たちを犠牲にして成り立っていることを知ったことも大きい。店を経営しながら、わたしはいろんな人との出会いのなかで成長していった。またフェアトレードの生産者の現場を訪れることで視野を広げることもできた。一〇カ国ほど訪ねたそれらの土地とは今もこころでつながっている。

事業と並行して講演会など啓発活動を企画してきたが、一〇年たってもフェアトレードが広がっているとは思えなかった。じつはそのころ、世界のフェアトレード・タウン運動を知って驚いたのだが、到底名古屋では無理だろうとあきらめて、それ以上考えもしなかった。

生産者を訪ねて

商品を作っている生産者を訪ねることは、見えなかった姿が見えてくるのでわくわくする。訪問前には想像の世界にすぎなかった生産者の姿が、訪問後はいつも隣にいるような錯覚すらあり、顧客にそのことを伝えるのはなんの苦もなく、現地で感じた気持ちは溢（あふ）れるように出てくる。それもまた喜びである。モノを通じて人がつながっている実感がある。二〇〇七年にメキシコの首都から車で六時間離れた陸の孤島とよばれているプエブラ州のケツァーランを訪ねたときは、ちょうどコーヒー生産者のトセパン組合の三〇周年ということでさまざまな祭事があった。教会の広場ではボラドーレスという儀式を見た。教会より高いくらいの支柱の上部に巻きつけた縄に体をつないだ四人の男たちが、鳥になったように支柱をくるくる周りながら舞い降りてくる。それを見たときは、人は天と地のあいだに有り、鳥に憧れているのだと思った。

旅先で訪ねる生産者は、おもに先住の民だ。質素な暮らしで、素朴な音楽や踊りなどが観光化される前の状態で存続している。そして彼らの組合の理念には、地球環境への強い思いがある。その同じ思いで生産者と先進国の消費者がつながるのがフェアトレードである。残念ながらその思いを抱く消費者はまだまだ少ないのが現状であるがゆえに、フェアトレードの理念を伝えるためにも、生産者を訪ね、製品の背景を消費者に伝えていきたい。

フェアトレードは運動だ！

二〇〇八年の秋、東京で開催されたフェアトレード団体の展示会に参加した。そのときに「みんなでフェアトレード・タウンになりたい！」って手をあげようという提案があり、それまで出来ないと思っていたわたしも、手を挙げる事なら出来ると、手を挙げた。すると、そこから蓋が開いたように、次々と情報が入り、翌年三月には「フェアトレード・タウンで町おこし」の講演に参加するために再度上京。名古屋でもフェアトレード・ラベル・ジャパン（FLJ）の中島佳織事務局長をお招きして勉強会を一一月に企画し、それにむけて六月には「名古屋をフェアトレード・タウンにしよう会（なふたうん）」が発足した。フェアトレードは運動であると改めて感じた。

「なふたうん」のおもな活動は、国際理解教育の参加型ワークショップを、学校（小・中・高・大）や生涯学習センターで開催することである。これまでに自主企画の三回連続講座「楽しく学ぶフェアトレード」「チョコレートの来た道」を含め、三年間で七〇回以上もおこなった。講演会やバザー出店も多数ある。毎年五月にはフェアトレード月間企画として、名古屋市・愛知県の国際交流協会と共催でフェアトレード企画を続けている。「なふたうん」の趣旨に賛同してくれたワンコインサポーターは、現在一八〇名にのぼる。月刊で「なふたうん新聞」を発行し、毎月の推進会議には、大学生や会社員、主婦など、職業も年代もさまざまな人が集まっている。

二〇一一年秋から一年かけて、市民・行政・議員・NPO／NGO・学校・企業なども参加して「名古屋にフェアトレードを広めるための会議」を隔月で開催した。その後、他のフェアトレード団体にも呼びかけ、二〇一三年一月「フェアトレード名古屋ネットワーク」がJICA（国際協力機構）中部にて発足した。このネットワークは、フェアトレード・タウンになるための六つの条件のひとつ、推進組織の設立と支持層の拡大に該当する。次に取り組むのは議会承認である。

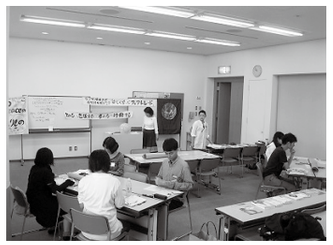
「わたしたちはお陰様で生きている。生かされている」と思い、地域や世界、そして自然とともに生きる思いをもったならわたしたちは平和に暮らせる。そしてフェアトレードは世界に視野を広げるきっかけのひとつであり、各分野の人とつながる縁結びの役もある。二〇一二年一二月に施行された「消費者教育推進法」は、公正で持続可能な社会形成に消費者として積極的に参画することを目指している。まさにフェアトレードの推進がうたわれているともいえよう。この機に、名古屋をフェアトレード・タウンにし、フェアトレードをいっそう推進することを目標にしている。

ろうけつ染めの作業（インドネシア）

生産者とコーヒーの木を植える筆者（2007年、メキシコ）

フェアトレードショップ　風"s（ふ～ず）の店頭

フェアトレード名古屋ネットワーク（FTNN）の発足は2013年1月11日


ワークショップ「楽しく学ぶフェアトレード」も8年目を迎える